国語学史研究及び国語研究資料

石塚晴通

一. 個人著作集

或る研究者の長年の研究を集大成して，著作集の如きものを刊行する場合，當然のことながら學史と資料研究との雙方に亘ることが多い。今期に刊行が開始され完了した個人著作集として

杉本つとむ著作選集1『日本語の歴史』，2『近代日本語の成立と発展』，3『日本語研究の歴史』，4『増訂日本翻訳語史の研究』，5『日本文字史の研究』，6『辞書・事典の研究Ⅰ』，7『辞書・事典の研究Ⅱ』，8『日本英語文化史の研究』，9『西欧文化受容の諸相』，10『西洋人の日本語研究』(八坂書房，1998.1—1999.11)

があり，双方に亘つてゐる。1992年に刊行が開始された大坪併治著作集(風間書房)は今期

『国語史論集下』(1998.8)

のみであり訓点語と訓点資料に関する研究に傾いてゐる。尚，今期末に

白川静著作集1『漢字1』(平凡社，1999.12)

の刊行が開始された。

二. 学史

今期は，長年の研究を纏めた単行書に實りが多い。

迫野虔徳『文献方言史研究』(清文堂，1998.2)

は，方言記録をもとに日本語の歴史を新しい角度から見ようとする意欲作である。

村上雅孝『近世初期漢字文化の世界』(明治書院，1998.3)

は，近世初期漢文訓読語の性格を巨視的に捉へようとしたパイオニアワークであり，資料研究や人物研究にも踏み込んでゐる。

松村明『近代日本語論考』(東京堂出版，1999.9)

は，近代語研究として學史に深く関はる。

小松英雄『日本語書記史原論』(笠間書院，1998.6)

は，前著『仮名文の原理』(笠間書院，1988)の第Ⅰ部を改訂して総説を含む5章を加へたものである。原論と銘打つて仮名文・漢字文に亘る書記史の構築に取り懸つてゐる。

森岡健二『欧文訓読の研究――欧文脈の形成――』(明治書院，1999.2)

も今期のユニークな成果である。日本人は，漢文を訓読する如く欧文を訓読して来たとする経緯の解明は労作であるが，表意文字である漢字漢文の構文を目で見ながら自言語で訓む漢文訓読と欧文の理解の仕方には大きな違ひが存するので，その解明が必要とならう。尚，文部省科學研究費交付の研究として

斎藤文俊「江戸時代蘭学資料における漢文訓読語法の国語史的研究」(平成9年度)

も存するので，この方面の研究の進展が期待される。その他，學史に関はる単行書として

西田直敏『日本人の敬語生活史』(翰林書房，1998.5)

馬場良二『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」――イエズス会士の日本語教育における日本語観』(風間書房，1999.3)

を挙げておく。

學史の教科書として，新しく

馬渕和夫・出雲朝子『国語学史　日本人の言語研究の歴史』(笠間書院，1999.1)

が刊行された。

東京大學國語研究室が1997年に創設百周年を迎へたことを記念して

『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』(汲古書院，1998.2)

が刊行されたが，日本で最古の研究室といふ意識は，自然に學史への関心を呼び，下記の論文が集まつてゐる。

築島裕「南海寄帰内法伝の訓説の伝流について」

矢田勉「印刷時代における国語書記史の原理」

石塚晴通「かなづかひおくのやまぢ攷――上代特殊仮名遣研究史上の一問題――」

肥爪周二「近世末期音韻学者の江戸語母音観察――悉曇学・蘭語学・国学・韻鏡学の交渉――」

古田東朔「コクゴ？クニコトバ？」

松村明「オルコック『日本語日常会話篇』とその日本語」

鈴木丹士郎「明治期漢語の品詞性と語形についての一考察」

尾崎知光「言語過程説の生成」

金田一春彦「有坂音韻論私観」

森岡健二「欧文訓読小史」

古田恵美子「文法術語『ROOT』の指すもの――ロドリゲスからチェンバレンまで――」

宮島達夫「わすれられた文法書『動詞教授資料』」

また，訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』が百輯に達したことを記念して刊行された記念特輯1998には，學史に関はる次の論文が集まつてゐる。

築島裕「妙法蓮華経における明詮の訓説の伝承をめぐって」

月本雅幸「因明論疏の古訓点とその伝承」

松本光隆「真言宗における儀軌訓読語の変容――金剛界儀軌の場合を中心に――」

山本真吾「守覚法親王と性霊集――漢文の，訓読たる〈理解行為〉と作成たる〈表現行為〉との相関性についての一考察――」

また，『国語と国文学』誌が 76-5（1999.5）号として「文字」を特集したことにより，學史に関はる下記の論文が集まつてゐる。

野村雅昭「字音形態素考」

伊藤雅光「構造字彙論」

石塚晴通「漢字字體の日本的標準」

佐藤稔「擬製漢字（国字）小論」

當山日出男「コンピュータの文字に対する意識について――錯綜する JIS 漢字論の根底にあるもの――」

佐藤栄作「草書・草化と字体」

その他，學史に関はる論文として注目すべきものを列挙すると，下記の通りである。

築島裕「大日経疏訓説の源流と伝承について」（『訓点語と訓点資料』101，1998.9）

小林芳規「奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色」（『鎌倉時代語研究』22，武蔵野書院，1999.5）

柳田征司「沖縄方言の史的位置――「キ」（木）「ウキ」（起き）「ウリ」（降り）などの問題（上）（下）」（『国語国文』68-4・5，1999.4・5）

渡辺英二「吉武春峰書写本『御国詞活用抄』」（鈴木朖学会『文奠』22，1998.12）

斎藤文俊「漢文訓読史上の佐藤一斎と宇野明霞」（『訓点語と訓点資料』102，1999.3）

園田博文「『参訂漢語問答篇国字解』（明治 13 年刊）に於ける訳語の性格――九州方言との関わり――」（東北大学『言語科学論集』2，1998.11）

今期，日本語による漢文訓読と深い関はりを有つ韓語訓読研究の面で大きな成果が有つた。

南豊鉉『国語史のための口訣研究』（韓国，太学社，1999.8）（韓文）

は，韓語訓点資料を用ゐての韓語史研究のパイオニアワークである。著者は口訣学會を創設し，機関誌『口訣研究』も 1996 年 2 月に創刊され，今期に第 3 輯（1998.6），第 4 輯（1998.8），第 5 輯（1999）が刊行された。特に第 3 輯は，高麗時代釋讀口訣の表記法に関する研究の特輯号であり，参考となる。更に

尹幸舜「韓・日の漢文訓読における不読字の訓法」（『訓点語と訓点資料』103，1999.9）

は，両語訓点資料を具體的に比較した成果である。尚，今期には

青山秀夫・熊木勉『朝鮮語漢字語辞典』（大学書林，1999.10）

も刊行され，また一般的な

宋敏著菅野裕臣他訳『韓国語と日本語のあいだ』（草風館，1999.12）

も刊行された。

三. 資料

上記の東京大学国語研究室百周年記念論文集には，下記の如き資料研究論文も集まってゐる。

宮澤俊雅「倭名類聚抄と漢語抄類」

月本雅幸「東京大学文学部国語研究室所蔵の古訓点資料から」

福島邦道「天草版平家物語とその周辺」

林史典「音韻資料としての円仁『在唐記』」

まつもとひろたけ「諸鈍方言の動詞の非終止形おぼえがき」

また同じく上記『訓点語と訓点資料』記念特輯には，下記の如く資料研究論文が集まってゐる。

小助川貞次「上野本漢書楊雄伝天暦二年点における典拠の問題について」

木田章義「『玉篇』とその周辺」

また，同記念特輯の下記論文は，學術的な資料の印刷に深く関はつてゐる。

金水敏「計算機による古典籍資料の組版・印刷について」

池田証寿「新旧分離字と新旧包摂字——JIS 漢字の所拠漢字表と包摂規準」

學術資料のコンピュータ印刷・組版は，目下の大問題であり，下記の如く文部省科學研究費交付のテーマとなつてゐる。

安永尚志「人文科学とコンピューターテキスト処理」(平成 9 年度)

金水敏「LaTeX による古典籍のコード化のためのマクロ作成」(平成 9 年度)

保立道久「日本中世古文書フルテキストデータベースの構築方法に関する研究」(平成 9 年度)

そして，上記金水の研究は，印刷・組版の困難が大きな障碍となつて刊行が途絶えてゐた高山寺資料叢書を，見事復活させるに至らしめたのである。

高山寺資料叢書 18『明恵上人資料第四』(東京大学出版会，1998.1)

には，訓点・注記等で組版の複雑になる資料が含まれてゐるが，LaTeX による組版の開発により學術資料として使用し得るテキストを実現したのである。同資料叢書は，引続き

高山寺資料叢書 19『高山寺本東域伝灯目録』(東京大学出版会，1999.2)

を刊行し，以後も年間 1 冊のペースで第三期を刊行中である。また，

貞苅伊徳『新撰字鏡の研究』(汲古書院，1998.10)

は，印刷困難字を池田証壽によるコンピュータ作字により，刊行に至らしめたものである。池田は，『古辞書と JIS 漢字』といふ雑誌を創刊し (1999.3)，信州大学や北海道大学の教へ子・同學研究者と共に，コンピュータによるフォント・組版の問題を積極的に取り上げてゐる (同誌第 2 号は 1999.10 刊，第 3 号は 2000.3 刊)。大學の言語情報學講座が，

単なるネーミングではなく具體的に機能してゐるケースである。

資料研究に於ても，今期は長年の研究の實りを示す単行書に恵まれた。先づ，

柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究』（武蔵野書院，1998.10）

は，今期の一大成果である。厖大な抄物資料を博捜・調査して，分類して室町時代語資料として位置づける作業を獨力で成し遂げてゐることは驚嘆に値する。著者には，もう一つ日本語の音韻史を構築するといふスケールの大きな作業が平行してゐるが，やはり抄物資料研究がライフワークと呼ぶに相応しく，今後の重点を此の方面に置いて欲しきものと念じてゐる。抄物の依拠注の解明，抄物と訓点資料との連関等，まだまだ大きな作業を必要としてゐるのである。

學史とも関はるものであるが

吉水蔵聖教調査団『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』（汲古書院，1999.3）

も，今期の大きな成果である。真言宗典籍資料の目録に比して手薄であつた天台宗典籍資料の代表的経蔵の目録が刊行されたことは，貴重な基礎研究である。解説として

山本信吉「青蓮院門跡吉水蔵聖教について」

築島裕「吉水蔵の古訓点本について」

小林芳規「吉水蔵の九世紀・十世紀の訓点」

が附されていることも有り難い。

小林芳規による角筆資料の研究は，獨壇場の観があるが，今期も，

小林芳規『角筆文献目録』1997 年版（自家版，1998.5），1998 年版（同，1999.6）

が順調に刊行され，更に 1999 年版（2000.3）は 1997-1999 年度に確認された角筆文献の目録を合し，更には小林芳規・山本真吾・松本光隆・鈴木恵・妹尾好信・西村浩子・原卓志・青木毅による角筆文献論考を附してゐる。また，吉澤康和による角筆マイクロスコープの解説も附されてゐて有益である。尚，小林には他に

小林芳規「醍醐寺の角筆文献――附，醍醐寺蔵，角筆文献一覧――」（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』17，1999.6）

小林芳規「沖縄県の角筆文献」（古典研究会『汲古』33，1998.6）

の如く，角筆資料研究論文がある。

ユニークな訓点資料研究書として

田島毓堂『法華経為字和訓の研究』（風間書房，1999.3）

が刊行された。妙法蓮華経中の「為」字全 618 乃至 616 例について慈恩大師窺基撰『法華経為為章』（「為為」ハ本来「為爲」トスベキカ）の注記をどのやうに反映してゐるかを，妙法蓮華経諸訓点資料を徹底調査したものである。漢籍訓点資料に比して，訓点が依拠する注釋書に恵まれてゐるとは言ひ難い佛典訓点資料で，依拠注を徹底追究したことは貴重な作業であるが，他の語句の訓点を全く配慮せずに成されてゐる記述は訓点資料研究としては聊か疑問無しとしない。

馬渕和夫『古代日本語の姿』(武蔵野書院，1999.1)

は，著者による上代・古代語資料研究論文の外に，韓国人研究者・留學生と共に取り組んだ古代朝鮮語資料を扱つた論文が収められてゐる。

井上宗雄・岡雅彦・尾崎康・片桐洋一・鈴木淳・中野三敏・長谷川強・松野陽一『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店，1999.3)

鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行『大蔵経全解説大事典』(雄山閣，1998.8)

は，資料研究の工具書として有用である。

上記に文部省科學研究費交付の研究を取上げたが，これらの報告書，及び

栃木孝雄編『続・平家物語の成立』(千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書，1999.3)

の如き近時増えて来た各大學の研究プロジェクト報告書の類は，労作・有用なものが少くないが，必ずしも入手することが易しくない。筆者の関係した

石塚晴通代表『学芸複合構造体（コーパス）としての寺院経蔵の綜合的研究——高山寺の場合を例として——』(平成10年度科研報告書，1999.3)

石塚晴通代表『漢字字体の研究』(北海道大学文学部プロジェクト研究報告書，2000.3)

の如きは，刊行後の需めに応じて刷り増しができる用意がしてある。

巽淳一郎代表『記号・文字・印を刻した須恵器の集成』(平成9年度科研報告書，1998.3)

の如きは，後になつて参照したき隣接分野の研究者も出て来るのではなからうか。その点では

阿部泰郎・山崎誠『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究』資料篇，研究篇(勉誠出版，1998.2)

の如きは，文部省科学研究費に係る報告書を市販の出版書として刊行してをり，成果が行き亘る上で此の方が望ましいことは言ふまでもない。

國語資料関係の注目すべき論文を列挙すると，次の通りである。

坂本義種「日本書紀朝鮮・中国関係記事注釈——巻第十四雄略天皇——」(『京都府立大学学術報告　人文・社会』51，1999.2)

山本真吾「表白・願文の用語選択——金沢文庫本『言泉集』の記述をめぐって」(『訓点語と訓点資料』102，1999.3)

山本真吾「自證房覚印の表白集について——十二世紀における表白集の編纂活動——」(『鎌倉時代語研究』22，1999.5)

酒井憲二「国宝鈴鹿本今昔物語集の書写状況」(『国語国文』67-1，1998.1)

平林盛得「鈴鹿本今昔物語集の紙捻りの実年代について」(『汲古』33，1998.6)

豊田尚子「藤原俊成自筆『古来風躰抄』における異体字をもつ仮名について——『記述部分』特有の仮名字体を中心として」(『鎌倉時代語研究』21，1998.5)

ニールス・グュルベルク「上野学園日本音楽室蔵三段『光明真言講式』について――明恵上人作の可能性と知道上人作五段『光明真言講式』との関係――」(『梁塵』16，1998.12)

石川聡実「『高松宮御蔵河内本源氏物語』に差された声点の性格」(『国語国文』67-4，1998.4)

石川幸子「平家正節の構成について――墨譜を手がかりに――」(『国語国文』68-7，1999.7)

小林賢次「大蔵虎光狂言集の本文の異同について――待遇表現に関して――」(『近代語研究』10，武蔵野書院，1999.10)

これらの中で，山本真吾による表白類の國語資料としての解明が光る。

次に，訓点資料関係の注目すべき論文を列挙すると，次の通りである。

佐々木勇「醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の声点加点について――前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈――」(『訓点語と訓点資料』103，1999.9)

原裕「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』字音点分韻表」(『訓点語と訓点資料』101，1998.9)

李京哲「東京大学国語研究室所蔵『仏母大孔雀明王経』の分韻表」(『鎌倉時代語研究』22，1999.5)

渡辺さゆり「書込音注から見た九条本文選巻第二の注釈書の利用について」(『訓点語と訓点資料』103，1999.9)

山本秀人「仁和寺蔵「胎蔵界尊号複金剛界尊号」の国語学的価値について」(『訓点語と訓点資料』101，1998.9)

田中雅和「和化漢文と定家の訓読――石清水八幡宮権別当田中宗清願文案における助詞と助字との関係――」(『鎌倉時代語研究』22，1999.5)

永松寛明「中世における『教行信証』諸本間の訓読の異同」(『鎌倉時代語研究』22，1999.5)

浅田健太朗「声明資料における「ずらし表記」の機能を巡って」(『訓点語と訓点資料』101，1998.9)

浅田健太朗「声明資料における補助記号「火」について――音楽譜における言語事象の現れの一例として――」(『鎌倉時代語研究』22，1999.5)

呉美寧「応永二十七年本論語抄における中国側注釈書の取り入れについて――朱子新注の取り入れを中心にして――」(『訓点語と訓点資料』102，1999.3)

これらの中で，原裕と李京哲とは同一資料に関する分韻表であるが，後から公刊した李京哲のものには音価や中古音体系の外に秦音体系を附す等の工夫が成されてゐる。また，韓語口訣資料の研究として，上記南豊鉉の労作が更に加へられた。

南豊鉉『瑜伽師地論釈読口訣の研究』(韓国・太学社，1999.12)

次に，古辞書関係の注目すべき論文を列挙すると，次の通りである。

内田賢徳「古辞書の訓詁と万葉歌」(『国語と国文学』75-5，1998.5)

蔵中進「『新撰字鏡』と『楊氏漢語抄』・『漢語抄』・『弁色立成』」(『国語と国文学』75-1, 1998.1)

大友信一監修・三宅ちぐさ編『天理大学附属天理図書館蔵世俗字類抄影印ならびに研究・索引』(翰林書房, 1998.8)

小川知子「節用文字と字類抄諸本の系譜」(北海道大学『国語国文研究』112, 1999.7)

山田健三「名義抄における切字反切の典拠」(『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集』, 1998.4)

山田健三「しほといふ文字は何れのへんにか侍らん——辞書生活史から——」(『国語国文』68-2, 1999.2)

田村夏紀「観智院本『類聚名義抄』と『龍龕手鑑』における漢字字体の記載の比較——異体字が連続して記される形式について——」(『早稲田日本語研究』6, 1998.3)

田村夏紀「観智院本『類聚名義抄』における熟語に用いられる漢字字体について」(『鎌倉時代語研究』22, 1999.5)

高橋久子「伊京集と桂本佚名古辞書」(『国語国文』68-10, 1998.10)

三宅ちぐさ「『撮壌集』と『下学集』」(東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集』, 1998.4)

次に, キリシタン資料関係では,

近藤政美・池村奈代美・濱千代いずみ『天草版平家物語語彙用例総索引』(勉誠出版, 1999.2)

は, 1 影印・翻字篇では, 影印と翻字とを見開きとして示し, 近藤政美「翻字に関する諸問題」が附されてゐる。キリシタン資料関係の注目論文を列挙すると, 以下の通りである。

小島幸枝「キリシタン資料の問題点——『ぎやどぺかどる』写本の「砂」をめぐる語詞から」(『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集』, 1998.4)

呉美寧「『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱について」(北海道大学『国語国文研究』111, 1999.3)

白井純「キリシタン文献の「ものなり」「ことなり」表現について」(北海道大学『国語国文研究』112, 1999.7)

次に, 外国資料・洋学資料関係の注目論文に, 以下の如きものがある。

高野繁男・日向敏彦『明六雑誌語彙総索引——付 複刻版明六雑誌』(大空社, 1998.5)

朴均轍「『哲学字彙』の訳語に関する一考察——「E の部」を中心に——」(北海道大学『国語国文研究』110, 1998.11)

山本いずみ「明治 40 年発行『辞林』に登録された外来語——明治 44 年改訂版との比較から——」(『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集』, 1998.4)

次に, 電子テキスト関係の注目論文に, 以下の如きものがある。

安岡孝一・安岡素子「新潮文庫にみる大漢和にない漢字」（京都大学大型計算機センター『第59回研究セミナー報告』，1998.3）

柴山守「異体字・外字を含む電子化テキストの諸問題と検討――琉球関連史料における事例と検索システム「電字眼」の開発――」（京都大学大型計算機センター『第59回研究セミナー報告』，1998.3）

池田証寿「地名の漢字をインターネットで検索する」（北海道大学『国語国文研究』113，1999.10）

千田大介「Unicodeの異体字問題と漢字文献データベースの構築におけるインターネット活用」（『人文学と情報処理』24，1999.8）

田窪直視「データベースにおける漢字処理の現状と展望」（『人文学と情報処理』24，1999.8）

下田正弘・師茂樹「大正新脩大蔵経データベース（SAT）における外字問題」（『人文学と情報処理』25，1999.10）

これらとも密接な関連を有つ基礎資料として

文化庁文化部国語課『明朝体活字字形一覧（上）（下）――1820年～1946年』（大蔵省印刷局，1999.9）

が刊行された。小宮山博史を中心とする佐藤タイポグラフィ研究所のスタッフが協力して，同研究所が所有する1820年～1946年の23種の活字総見本帳を字種ごとに一覧できるやうに纏めた労作であり，明朝体活字の字體・字形問題を扱ふ際の基本資料が提供されたことになる。

最後に，資料と関連深い印刷の問題に触れておく。

中根勝『日本印刷技術史』（八木書店，1999.12）

は，幅広く中国・韓国より説き起し，日本の百万塔陀羅尼を初めとして第二次大戦後の印刷に及び，随所に経験に裏打ちされた記述があり，参考となる。また，

韓国・延世大学校『世界印刷文化の起源についての国際会議』（『東方学志』106，1999.12）（韓文及ビ日・中文韓訳付）

は，1999年10月に韓国・延世大学校に於て開催された国際会議のProceedingsであるが，全642頁の大部な論文集であり，日本の百万塔陀羅尼，韓国の無垢浄光大陀羅尼，中國の初期印刷等が綿密に検討され，印刷の起源に関する考察の到達点を示してゐる。執筆者は，日本の石塚晴通・大川昭典・赤尾榮慶，韓国の金聖洙・朴智善・柳富鉉，中国の潘吉星・肖東發・陳振濂であり，韓国の千惠鳳等との論義も収められてゐる。

――北海道大学大学院教授――